

準グランプリ



農業高校の日常より

齋藤慎吾様



私は現在、農業高校の教員として働いている。花部門の担当となつて2年目で、園芸福祉科という学科で園芸の授業を担当している。生徒は明るく素直で、ユーモアもある。どちらかといえば園芸よりも演芸のほうが向いていると思いつながら、毎日楽しく授業をさせてもらっている。

「先生、今日は何するんですかー？」
始業前、花の温室の前で生徒を待っている私に彼らはいつも遠すぎる距離から話しかけてくる。「今日はポット上げだな」と答えると、「任せてくださいよ！」と頼もしいことを言ってくれる。実際彼らは頼りになる、ときの方が多い。

種をまき、発芽して、葉が展開する。小さな変化にも彼らは感動してくれる。生育が悪いときには何が悪かったのかと考へてくれる。生育の過程で弱々しい苗はそのまま捨てることになるが、



そうすると「え、せっかく育てたのに！」と悲しげな生徒もいる。そういう生徒の心が動くような瞬間や、植物に対する慈悲深さを目にするたびに、生命に寄り添える生徒を育てないといけないという気持ちが強くなる。しかし、実際に生徒にとつての本当の先生は目の前の花であることが多い。私のレベルではまだまだその本当の先生に敵いそうになり。悲しくもあり、虚しくもあるが、生徒が育つてくれているのであればそれの良いとも思う。

花を育て、そして花を教材として授業をしていくよく考えることは、人類が花を必要とする意味についてだ。稲作、畜産、酪農、果樹、野菜、このどれもが

我々の食生活を支えている。しかし、花は一般的に食用としない。それでも、花は私たちの生活に欠かせない。「花がなくても生きていける」というのは花をちゃんと育てたことがなかった過去の私の声であり、そんな私と同じように花に縁遠かった多くの人の声であろう。なぜ人類は花を必要とするのか、その答えを私に示してくれたのも生徒たちだ。彼らの表情を見れば分かる。きっと花は自己満足では育てられない。その花を見て喜んでくれる誰かのため、その花を手に取つて微笑んでくれる誰かのため、花は常に誰かのためを思つて育てられる。「花を育てるといふことは笑顔を育てること」

歯が浮きそうになるこんな言葉をいつか言ってみたい。まだまだそんなことを伝えられるほどの経験は積んでいない。いつかその時が来たら生徒は真剣に聞いてくれるだろうか。それとも「先生、そんなこと知ってますよ」と得意気に笑うだろうか。

講評



理事 川人 紫

日々農業高校での授業を通じて生徒に植物との共生の大切さを伝えることは生徒のこれからの長い人生にとって必ず良い影響を与えるに違いない、と思いつながら文章を読ませていただきました。生徒に花の育て方を教える目的は、技術的なことはもとより、植物が人間に与えてくれるもの、すなわちそれがガーデンセラピーであり、自分たちが学んでいることは、人々の心身の健康に大きく貢献できると認識することだと齋藤先生は毎日の実践を通して生徒に伝えているのだと思います。
将来のガーデンセラピーの発展を生徒さんらがリーダーとなって担って行っていただきたいと切に願っております。